

太和八年銘丁柱造金銅蓮華手菩薩像考

熊谷宣夫

この像（圖版V）は、早く大村西崖氏の支那美術史彫塑篇^{大正四年・附圖一五九}に收録されてゐる。その銘文は臺座及び光背にあつて、^{第四六五圖}

（挿圖1、a b）

太和八年太歲

在甲

子」

辛未朔

（以上臺座向左侧面）

九月十九日

樂

陵縣

人丁柱、爲亡父

（以上臺座背面）

造觀世像音

一軀、

（以上臺座向右侧面）

丁利丁符兄弟六人

居家大小一十六口、願々」

太和八年銘丁柱造金銅蓮華手菩薩像考

從心、當與佛會。（以上光背裏面）
と讀まれる。

彫塑篇はその注記に「銘。觀音。高五寸五分。羅君拓本。第四六五圖」とするが、その第四六五圖は拓影であり、羅振玉の拓本により收録したことが明かである。またその銘記收録に當り、臺座右側面の「造觀世像音一軀」を逸してゐるが、この像が昭和二十七年當時の駐日イタリア大使ダエッタ Marchese Blasco Lanza D'Ajeta 氏の藏に歸するに先立つて、その寫眞と銘記拓本をとどめ、本誌圖版V及び挿圖はそれによるものであり、大村氏の逸文を補ひ得たことは幸である。これは當時調査された田澤氏の示教によるものである。また文中の「樂陵縣人」の樂字の書方は、同氏藏の太和二年銘張賣造像^{美術研究二百三號}挿圖2の銘記中の「樂成人」の樂字と酷似するものであることも同氏より注意された。張賣造像が太和二年⁴²⁸銘であり、これが太和八年⁴³⁴銘で、時代の距りもなく、特殊なこの樂字の書方の共通することは、當時の慣用として認むるに充分である。

従つて兩者の銘記が共に信用すべきものとならう。この像が四脚方座の上に立ち、火焰文で飾られるいはゆる舟型の光背を負ひ、しかもその光背の下端が臺座は接することなく上方で終るのみならず、

挿圖1a 太和八年銘丁柱造金銅觀音像臺座拓本



側 左 向

衣文も裾短かに纏められ、裸足あらはに踏まへる像容は、これに先立つては、最近水野清一教授の「中國の彫刻」昭和三五年で、ひろく世に紹介された皇興四年

の銘像同書96、同五年の銘像同書73・74がある。この太和八年

銘像につづいては大村氏彫塑篇收録のものに求めて

○太和十四年六月二日、安次縣

人齊道和、爲父「母眷屬等、敬

造光世音一區、願」見世安隱。

(銅。高五寸二分。第四百六十九

圖。伊東博士寫眞。陶齋吉金錄八

に出づ。同書縣を將に作る。光世

音は即ち觀世音なり。)一八八頁、

附圖一七七。

○太和十六年十月四日、比丘僧慧教、爲亡父母、居家大小存亡、常值諸佛、願々從心。(銅、高五寸。古河家藏。第四百七十圖。前



三〇

挿圖1b 同上像光背裏面拓本

者と同式の觀音なり。)一八八頁、附圖一七七。

○太和廿二年十二月二日、□□人吳道興、爲亡父母、造光世音一區、願居家大小、託生西方妙洛世界、所求如意、兄弟姊妹六人常與佛會。(銅。高八寸五分。羅君拓本。第四百九十三圖。洛は樂の借。光世音は觀世音の異譯なり。)一九八頁、附圖一九一。註1

○景明二年四月……

(銅。高九寸八分。觀音像。第四九五圖。羅君拓本。)一九九頁、附圖一九二。

○延昌三年七月□日、趙常住妻郭、敬造觀世音一區、上爲七世父……從心、故記之耳。(銅。高四寸五分。第五百一圖。古河家藏。)二〇九頁、附圖一九三。

490, 492, 498, の銘記ある五點、更に羅振玉の夢鄴草堂金石圖卷下 38 501, 514 に

永平二年二月廿 □□□傳次胡上爲「亡父母□□己身」造觀世像一區□中供養(挿圖2)。509。銘記ある同様の像容の金銅像がある。これに就いて、羅

氏はその目次に

北齊傳次胡造象 同上(未著録)

とし、銘文最初の年號を「武平」

と鑑識した爲である。^{註3} 皇興四

年銘像以下すべて未敷蓮華を右

手に擎げることにあつて景明二年

銘像とこの像のみが、左手に蓮

華を持つものである、おなじ像

容であることに留意され、この

兩者の親近な關係は、景明二年

501 から八年間の少差である永

平二年 509 かとする一理由であ

る。武平二年 571 とすれば七十

年間の大きな距りとなり、且つ

後述の如く北齊時代に、この殘

存様式を認めることは困難であ

り、銘記を後刻と解釋する他は

ない。また本誌百九十八號松原

氏「北魏正光期河北派金銅佛の一典刑」では延昌二年 513 銘、^{同號9}

永安三年 531 銘 ^{挿圖18} の二像を紹介されているが、なほこの間にア

ンチアン Lei Ashton の An Introduction to Study of Chinese Sculpture,

1924 Pl. XXXIV, Fig. 1. に紹介された熙平元年 516 銘の觀音像は高く



面 背

側 右 向

且つ左右に張つた正面の頭飾、更に頭部の左右から張出した下方に垂れるリボン狀の頭飾、右左の身側に段々と天衣を纏す服飾が、前述諸像と相異なるが、右手に蓮華、左手に水瓶を持ち、光背と臺座の間は空きある形式が一應保持される。しかしこの年代前後して、前述夢鄚草堂吉金圖卷下三十七の

延昌□□四月八日「王之家天小」^{註3}「造觀世音像一」軀所願從心(挿圖3)。

と光背裏面に鐫銘のある金銅像は、右手に従前の如き、はつきりした未敷蓮華を認めがたく、或は楊柳かとも思はれる持物となり、左手には太和十四年銘、同十六年銘、熙平元年の像にみられた水瓶が異つた形であるが、クロオズ・アップされる。加へて光背は臺座に接する形式となるが、この延昌年間 512~511 について、シレン

Oswald Siren が、その Chinese Sculpture, 1925 ^{註4} に所載する Vol. II. Pl.

148B の 520 (北魏神龜三年) 銘、同 Pl. 205A の 538 (東魏元象元年) 銘、同

Pl. 205B の 539 (東魏天平六年) の觀音像は、いづれも光背及び衣文長く

臺座に接する形式となり、同 Pl. 205C の像のみが、所藏のワシントン

のフリア・ガラリイの標表が 542 (東魏興和四年) とするもので、右

手に蓮華を持ち、衣文裾高かに光背は臺座と離れて制作されて、む

しろこの太和八年銘像に近いのを例外とする。また最近の文物 ^{一九六〇}

二月號六に報ずるところによれば河北省の廢銅物件中に

正光三年十月二十六日、新成縣梁仲華夫妻、爲二母尊觀世一區。(挿圖4)

の銘記ある、太和年間像の右手に蓮華を擎げる像容を踏襲しながら

光背、天衣が臺座に接續するものが見出され、正光三年 522 に當り、

北魏末の一作例である。

この北魏末より東魏の造像については本誌百九十八號に松原氏が紹介された

延昌二年 513 銘	同誌 挿圖	10	熙平元年銘 516 銘	上同	11
神龜二年 519 銘	上同	12	正光二年銘 531 銘	上同	8
永安三年 531 銘	上同	16	興和四年銘 540 銘	上同	19

に見られる金銅觀音像で、右手掌を前にして上げ、左手も掌を前にして下げ、後述の釋迦或は彌勒の立像と何ら手相に於いて異なることのない系列と合流するあり方を示すものであり、ついで同氏が國華八〇一號に「魏齊様金銅觀音菩薩立像について」で紹介された北齊天保三年 552 銘像以下に引繼がれ、更にその一例として夢郭草堂吉金圖卷下三十九の

挿圖 2 永平二年(?)銘像

(臺座左側面カ)
武平五年四月「八日」王□貴□造像「一區供養爲所生」
父母「因像」眷屬及□地「衆生□成」(挿圖 5)。
と 574 の銘記ある金銅像を加へるが、皇興四年銘以下永安三年銘に及ぶ蓮華手と呼ぶべき像容の統一性が破れて、東魏、北齊へと變容する過程が察知される。申添へるまでもなく、像容が動勢を示し、技法も線刻を主として、粗略ながら活氣が認められ、且つ一種エキゾテイクな情趣を伴つたものが、延昌年間以降さうした諸要素を次第に拭去り、安定した像容となり、量感を増し、また裝飾的な傾向を示すことを否定し得ない。

ともあれ、この北魏時代の觀音立像の系譜に連なるものは、太和十四年銘、同二十二年銘像ではその銘記に「光世音」と記され、像容は前述の如く、蓮華手 Padmapāṇi 菩薩とも呼ぶに相應しい特徴あ

挿圖 3 延昌年間銘像

る統一性を保持するが、様式的には、同時代の彌勒或は釋迦と呼ばれる佛立像形式と並行するものであることは一應顧るべき必要があらう。即ち

皇興 五年	471銘	松原氏、	中國彫刻篇55・56、水野氏、中國の彫刻	97
延興 三年	475銘	松原氏、	同 57 水野氏、同	98
太和 七年	483銘	松原氏、	同 60 水野氏、同	106 註5
同 八年	484銘	水野氏、	同 106	
同 十四年	490銘	大村氏、	彫塑篇、附圖一七七第四六八圖	
同 十六年	492銘	松原氏、	中國彫刻篇62	註6
同 二十年	496銘	シムン氏、	Vol. II, Pl. 147A	註7
同 二十二年	498銘	水野氏、	中國の彫刻 10 112 113	

の如き諸像の系譜がそれである。云ふまでもなく、むしろこの佛立像形式が主流であり、今、問題とした觀音菩薩の傳統は、この主流に並行して引かれた側線とすべきであらう。ここに太和八年銘像を

太和八年銘丁柱造金銅蓮華手菩薩像考

挿圖 4 正光三年造像

紹介する意義は、その觀音像の系譜の中にあつて、最も早い年代を明示する典型的な遺品であることに他ならない。

註1 大村氏彫塑篇はその注記の如く、羅振玉氏の拓本を第四九三圖とするものであるが松原三郎氏東洋美術史、卷下、中國彫刻篇63・64、昭和三十二年、水野氏、中國の彫刻、圖版112、113にその寫真を見得る。

註2 羅振玉篇、夢鄴草堂吉金圖は、上・中・下三冊、大正六年序、續篇一冊、翌七年度の著録である。その下冊に

卅五	魏	李誠造象(太和二年銘)附載挿圖6
卅六	同	比丘道可造象(太和二年銘)
卅七	同	薛王之造象(延昌年間銘)挿圖3
卅八	北齊	傅次胡造象(武平二年、或は永平二年銘)挿圖2
卅九	北齊	王口貴造象(武平二年銘)挿圖5
四十	隋	郭清醜造象(開皇元年銘)
四十一	隋	比丘惠寶造象(開皇七年銘)
四十二	隋	王子□息子乘造象(開皇十二年銘)
四十三	唐	皇甫段愍造象(龍朔元年銘)
の九軀の佛像、續篇には		
六十三	唐	淳于君儒造象坐(總章元年銘)
六十四	唐	垂拱四年造象坐

挿圖 5 武平五年造像

の二箇の佛像臺座を、寫眞及び拓本をもつて紹介されてゐる。佛像關係資料は以上十一點で、少數に過ぎないが、その重要性は決して看過し得ない。この希觀の史料については、西川寧、同杏太郎、田澤坦、杉村丁諸氏の示教を仰いだことに厚く謝意を表するものである。

註3 原作品を實見し得ないため、ここには同吉金圖によつて、その寫眞のみを掲げ、今後の検討に資するに留まる。銘記の問題或は正面の頭飾、左手に持つ三片を識別し得て必しも未敷と云へない蓮華など、他の例に比して多少異様の感がある。後述の熙平元年銘像の如きものと共に、問題を存する制作であらう。

註4 シン Chinese Sculpture 6 Vol. II Pl. 148A 觀音像は無銘であるが、この516銘像に最も近い像容で、しかも光背、衣文が長くなり、臺座に接する。本論中の推移と軌を一にするものとして、516に近い時代の制作とすべきであらう。

註5 この像の銘記にも問題があり、この年次に定置し得るか保留されなければならない。しかし像そのもの、光背、臺の制作に關しては、この太和年間の一好遺例であることは疑を容れ得ないであらう。

註6 この像と酷似する形式で、普泰二年533銘の像が世に知られてゐるが、その銘記も問題とされることを、ここにはお断りして置きたい。

註7 シレン收録の同像容の釋迦佛としては、同著 Vol. II, Pl. 146A 東京江藤氏藏の444(太平眞君五年)銘像があるが、その紀年がこの像の様式として早きに過ぎる惶があり、一應除外した。

附載

「中國初期金銅佛の二・三の資料」補正

熊谷宣夫

本誌二百三號所載の筆者論文に紹介した太和二年銘金銅佛坐像二百三號圖版Vの銘記同號の解讀については、六行目(左側面初行目)を所藏者である田澤氏から左記の如く訂正すべきことを示教された。

爲亡父母造

なほこの造像に關しては、早く大村西崖氏の支那美術史彫塑篇大正四年に、北魏太和二年580の造像として

○太和二年四月八日、彭雨徂造像一區、願々成就、龍花樹下、三盒初手。

(手は首の聲借。銅。高三寸二分。羅君拓本。第四百六十一圖)

○太和二年十一月十日、比丘道可敬□觀像一區「願□化生西方、天□□」

□蓮花□生……

(銅。高三寸。羅君藏。第四百六十二圖。觀字の下音を脱するか。)註

○大魏太和二年、王元法造「彌勒像一區」求父母康延「一切群生咸」同斯福。(石。像座ツマ。文の両邊に供養者三人の浮彫あり。中村不折君拓本。)

○西王美好造象。太和二年。

(石像。安徽青陽吳氏拓本。補寰宇訪碑錄二。)

○張賣造象。太和二年。

(同前。)

の五點を挙げ、その最後のものが、田澤氏藏品の銘記に張賣の名が見えることと一致する。但し大村氏が同前とする注記を、西王美好造象の石像とすることに従へば、該當しないが、その典據とする趙之謙の「補寰宇訪碑錄」卷二には